

1. はじめに

理学部長 永田 潔 文
理学研究科長 田中 勝

理学部・理学研究科では、本学部・研究科の教育・研究活動を総括するとともに学内外の人々にお知らせするために、2012年度から「理学部・理学研究科年報」を発行しています。本年報には2018年度の理学部・理学研究科の活動年譜、教員組織、学部・研究科の教育・研究活動、入学志願者の状況や就職状況、社会貢献、国際交流、各学科の研究室毎の活動状況等がまとめてあります。

理学部は1970（昭和45）年4月に応用数学科・応用物理学科・化学科の3学科で創設しました。1976年4月に理学研究科応用物理学専攻および化学専攻の各博士課程を、1990年4月に理学研究科応用数学専攻博士課程を設置しました。その後、1998年4月に地球圏科学科を、翌年4月に理学研究科地球圏科学専攻博士課程（修士課程は1997年4月）を増設しました。理学部は、「数学を含む自然科学領域の探究を通して社会の健全な発展に貢献する」という教育理念を基に、「基礎学力を十分に修得し、自然現象を幅広い視野から理解し、自ら問題を提起し、知識の活用ができる豊かな人間性をも兼ね備えた人材を育成する」ことに努めてきました。また、国際化・情報化、グローバル化の21世紀社会に対応し、既存の学問分野を融合した思考・発想ができる人材を育成するために、2008年4月に文理融合型の人材の育成を目指す「社会数理・情報インスティテュート」と「物理」と「化学」を柱とした「ナノサイエンス・インスティテュート」を設置し、さらに同年4月には応用物理学科を物理科学科に改称する改革に努めてきました。

研究活動においては、国内外との共同研究や著名な外国人研究者の招聘など国際的なレベルで研究を進めています。また科学研究費をはじめ外部資金の獲得も積極的に行っています。「福岡から診る大気環境研究所」は、15機関（大学、研究所、企業等）19名の学外研究員を迎え産学官連携事業を活発に行っています。2017年に引き続き、2018年5月にも長崎県福江島における大陸起源汚染大気質の無人航空機観測を金沢大、国立環境研究所と共同で実施し、本学キャンパスを環境省のPM2.5組成自動観測装置を含む総合観測サイトとして運用し、観測を軸としたPM2.5の健康影響に係る観測、実験などを継続しました。

本学部・研究科の社会貢献活動としては、地域の教育支援活動、地域との交流活動を推進しました。詳細は本年報をご参照願います。

2018年4月に、端山和大 准教授（物理科学科）、岩山隆寛 教授（地球圏科学科）が着任しました。2019年3月末に、福嶋幸生 教授（応用数学科）、小林錦子 助手（応用数学科）、山口武夫 教授（化学科）、安藤 功 教授（化学科）が退職しました。福嶋 教授と山口 教授には2019年4月に福岡大学名誉教授の称号が授与されました。これらの退職された先生方は長年にわたり理学部の教育・研究活動に携わってこられました。ここに改めて感謝の意を表します。

国際交流事業では、2018年度には理学研究科に外国人研究員として、Ding Qing（ディンチン）（復旦大学）、Elzbieta Pieczyska（エルズピエータ ビエチェスカ）（ポーランド科学アカデミー）、Sofia J. Araújo（ソフィア アラウージョ）（バルセロナ大学）、Roland Friedrich（ローランド フリードリッヒ）をそれぞれ招聘して大学院生の指導や教員との共同研究を遂行しました。また、国際交流事業として、ナノサイエンス・インスティテュートコース3年次生13名を蔚山大学に派遣し、「材料科学国際演習」として英語の講義を履修しました。また、「日韓交流セミナー」として、化学科と数学科の学部生16名及び大学院生18名、引率教員及び事務職員9名が蔚山大学を訪問し、英語によるコミュニケーション能力の向上と国際感覚の涵養を図りました。

グローバル・アクティブ・プログラム(G.A.P.)により、応用数学科2年次生がEF オックスフォード校（イギリス）、EF ケンブリッジ校（イギリス）、EF ホノルル校（アメリカ）、EF シドニー校（オーストラリア）、EF セントジュリアン校（マルタ）に各1名、物理科学科2年次生がEF バンクーバー校（カナダ）に2名、化学科は2年次生がEF オークランド校（ニュージーランド）に2名、そして地球圏科学科2年次生1名がEF ボストン校（アメリカ）で1ヶ月間の海外研修を受けました。

その他にも、応用数学科2年次生2名、化学科3年次生1名、地球圏科学科1年次生1名がグリフィス大学（オーストラリア）やニューカッスル大学（イギリス）、蔚山大学校（韓国）、ウオッシュバン大学（アメリカ）等の本学の協定校で海外研修を受けました。